

英国の高等教育機関における対応の現状

西澤芳織 (オックスフォード大学)

Supporting Japanese Language Learners with Dyslexia in UK Higher
Institutions:
A Report on the Realities and Issues

Kaori NISHIZAWA (University of Oxford)

キーワード： ディスレクシア, 支援, 補償のための, リメディアル, メンタリング

Keywords : dyslexia, support, compensatory, remedial, mentoring

SUMMARY

This paper surveys support available to dyslexic students learning Japanese in the UK higher education system, and evaluates the current support system. The paper first overviews the UK support system, followed by a summary of findings from previous studies on reported support and perceived difficulties by teachers and dyslexic students. The paper concludes with action points to be noted for dyslexic students to succeed in learning Japanese at higher institutions.

1. 英国におけるディスレクシア支援制度の概要

本稿は、英国の大学において日本語を学ぶディスレクシアを持つ学生が受けうる支援についてのまとめと現場の教師や学生が直面しうる困難についての考察である。まず、英国のディスレクシア支援の概要から述べる。

英語は表記の透明性が低く（文字と音の対応が規則的でない）、粒性が小さい（綴りの最小単位が音素レベル）ため、ディスレクシアの出現率が比較的高いとされる。British Dyslexia Association（以下 BDA）によると、人口の 10% がディスレクシアであり、うち 4% が重度のディスレクシアの症状を抱えていると言われている。法律上支援が義務付けられている特定学習障害（Specific learning difficulties, 以下 SpDLs）の一つであり、正式にディスレクシアであると診断されれば、就学前から 25 歳までの支援が法的に保障されている。大学や専門学校への入学や、就職の際の差別も法的に禁止されている。なお、ディスレクシアの診断方法、診断手順は一つに統一されているわけではないが、診断者に必要な資格やテストのタイプについては一定の基準がある。

児童・生徒に対する支援は、各教育機関、または学区毎に配属される Special Educational Needs Coordinator（略称 SENCo）を中心に行われる。ディスレクシアが疑

われた場合、両親や教師はまず SENCo に連絡する。診断を受けて、ディスレクシアであると認定された場合、statement of special educational needs と呼ばれる診断書が発行される。この診断書を元に、支援内容が決められていく。英国はインクルーシブ教育が奨励されている国であり、いわゆる特別支援学級へは入れずに普通学級の中で支援を受けながら、他の児童生徒と一緒に学ぶことが一般的である。もちろんディスレクシアの児童を専門に受け入れる学校も存在し、そのような学校を選ぶことも可能である（窪田, 2007）。また、放課後や長期休暇中の支援プログラム、病院への交通費などの金銭的支援も用意されている。

支援内容は、子どもの進級に合わせて見直しが行われる。Year 9（義務教育終了年）になると、進学、就職を視野に入れた支援が組み込まれて行く。例えば、大学進学を希望する生徒へは、入学前にすべきこと、入学したらすぐのこと、コースの選び方、支援の受け方などについての助言が盛り込まれた手引書が用意されている（Disability Rights UK による「Into Higher Education」など）。進学しない場合も、必要な職能訓練などが受けられる。

高等教育機関では、各教育機関に配置された学生支援センター（Student Support Office、Disability Office などと呼ばれる）が中心になり支援が行われる。また、障がいのある学生には、Disabled Students Allowances（DSAs）と呼ばれる補助金が支給される。ディスレクシアの学生も支給対象である。学生はそれを使って診断テストや人的支援サービスの費用を支払ったり、必要な福祉機器を購入したりする。申請受付と認定は、現在 BDA により行われている。なお、近年、DSAs 支給額の削減が懸念されている（Lewthwaite, 2014）。

2. 大学におけるディスレクシア支援の実態

2.1 ディスレクシアを持つ大学生に関する統計

最新の統計データ（Department for Education, 2016）によると、英国の大学進学率は48%である。大学進学率は年々高まる傾向にある。これは、インクルーシブ教育の推奨や Widening Participation と呼ばれる大学進学率の低い地域や大卒者のいない家族出身の学生の大学への入学を推進する教育政策の効果による。当然教育上何らかの特別なニーズを必要とする学生数も増加している。アクセス可能な最新のデータ（Department for Business Innovation and Skills, 2014）によると、2013年度の入学予定者のうち、何らかの障がいがあるという正式な診断書を持っている学生は約8%であった。2014-15年度の Higher Education Statistics Agency の統計では、DSAs の受給率は7%であった（HESA, 2015）。さらに、SpLDs の学生は英国の全学生数の約5%を占め、うち、ディスレクシアが最多であると報告されている（Cameron, 2015）。

ディスレクシアの学生は、英国の大学生活に適應できているのであろうか。Richardson and Wydell（2003）によると、ディスレクシアの学生が専攻する科目には、一定の傾向が見られる。医学・薬学・語学・法学・教育学を専攻するディスレクシアの学生は、それ以外の科目を専攻する学生より少なく、また、農学・工学・建築学・自然科学・芸術など、文字の読み書きを比較的不要としない科目を専攻する傾向が見

られた。さらに、卒業時の成績との関連を見ると、ディスレクシアの学生は、ファースト・クラスと上位セカンド・クラスの成績を修める学生がディスレクシアではない学生よりもやや少なく、下位セカンド・クラスとサード・クラスを修めて卒業する学生がやや多いことが明らかになった¹⁾。支援を受けていてもディスレクシアであることが卒業時の成績に全く不利にならないとは言えないようである。

2.2 学生支援センターの役割

前述の通り、各大学には障がいを持つ学生のための支援センターが設置されている。ディスレクシアである学生、あるいはディスレクシアが疑われる学生はまずここを訪れる。ここで専門家による診断を受け、支援内容が決まる。最初の診断だけではなく、その後も定期的にカウンセリングを受けたり、勉強方法についての助言を受けたりする。さらに、入学願書の中にも障がいの有無を申告する欄があり、ここに書かれた内容によっては、学生の入学前から大学が学生を受け入れるための対応を始めることも可能である。

ディスレクシアの学生についての情報を各学部・担当教員へ連絡する方法は、教育機関によって異なる。筆者が行った英国の複数の大学の日本語教師への聞き取り調査(西澤, 2014)では、学生支援センターが学生を介さずに学部へ直接連絡を行う大学と、学生自身が支援センターから発行される証明書を学部や教師に提出して支援を要請する大学とあることが分かった。支援センターが学部へ直接通達する方式は、学部内での連絡(事務局から担当教師への連絡など)や関連学部への連絡(主専攻の学部から選択科目の学部への連絡など)が滞る場合がある。学生が証明書を提出する方式は、そのような現場の教師への連絡の滞りはないかもしれないが、発行された証明書を提出しないという選択肢が学生自身に残されている。

さらに、英国では成績を決める試験は学年末(あるいは学期末)に学部とは独立した試験センターで一斉に行われる場合が多い。よって学部や教師への連絡とは別に、試験センターにもディスレクシアの学生への試験時の支援についての連絡が届く。主な支援の内容は、以下で述べるように、時間延長や別室受験、解答用紙の表紙にディスレクシアの学生であることを知らせる注意書きの色紙を添えることなどである。

さらに、支援センターは、ディスレクシアの学生への支援だけではなく、学部や教師、その他一般の学生へ向けての啓蒙活動も行っている。例えば、ディスレクシアのプロモーションビデオをウェブ上で一般公開したり、教師向けにディスレクシア体験セッションを企画したり、学部に出向いて支援内容についての説明会を開いたりというようなことである。

2.3 支援内容

英国の高等教育機関におけるディスレクシアの学生への支援内容は、「補償のため(compensatory)」の支援が中心である。これは、ディスレクシアそのものを克服することを目的とした「リメディアルな支援」ではなく、できる限りディスレクシアの症状に伴う困難が経験されずに学習に適応できるようにするための支援である(窪田,

2007)。子供と異なり、症状そのものにアプローチする訓練を受けるための時間的余裕がなく、今すぐの問題解決が求められているからである (McKnight & Davies, 2012)。主に福祉機器 (Assistive Technologies, 以下 ATs) の提供、人的支援の提供、時間延長などのその他の補償のための特別配慮の三つに分類できる。以下に主なものを挙げておく (表 1)。

表 1 大学での支援内容のまとめ

ATs の支給・貸与	ハードウェア：パソコン、スキャナ、録音機器など ソフトウェア：マインドマップ、音声認識ソフト、テキスト音読ソフト、タイピング補助ソフトなど
人的支援	メンター、アドバイザー、ノートテイカーなど
補償的特別配慮	時間延長 (試験時、授業中の小テスト時、課題提出期限)、テキストのフォント指定・拡大コピー、テキストの電子化、パソコン使用の許可など

2.4 メンターによる支援の例

人的支援の内容について、もう少し詳しく述べておく。ディスレクシアの学生は、読み書きだけでなく、日々の時間管理や学習の管理にも困難を抱えがちである。このような側面の支援のためにメンターが存在する。例えば、メンターはスタディー・スキルについて助言したり、定期的に学生と面会して、学生の学習スケジュールを共に見直し、時間管理を助けたりする。また、学生が講義中にとったノートを共に見直し、より分かりやすく書き直す作業を手伝ったり、書いた論文を見直して、読み手により伝わりやすくなるように論文の構成を組み直すのを手伝ったりすることもある (西澤, 印刷中)。メンターと学生との相性もとても大切になるため、大学院生など、すでに以前所属した大学で良い関係を築いているメンターが存在する場合は、途中で教育機関が変わっても、同一のメンターから継続して支援を受けることが可能である。

なお、語学を専攻する学生のための学習管理を支援したメンタリングの実例は残念ながら得られていない。ただし、一部の大学では、語学を履修しようと思うディスレクシアの学生に向けたアドバイスが大学のウェブページ上で公開されている。例えば、ハル大学 (University of Hull) のサイトには、「教師の近くに座ること」、「語学はチャレンジだと思って取り組み」、「ディスレクシアの症状について教師からの理解が得られなくても驚くな」、「自分でノートを取るよりも教師からレクチャーノートをもらえ」、「とにかく繰り返し練習に励め」というような助言が掲載されている。

3. 大学における日本語コースでの支援の実態

3.1 日本語コースでの支援の実例

日本語を学ぶディスレクシアの学生への支援の内容も、上述したものとほぼ同じで

ある。2015年8月に行われた欧州の日本語教師へのオンライン意識・実態調査(池田・他 2015)へ寄せられた英国の日本語教師からの回答(n=29)には、ディスレクシアの学生に対して行われた支援として試験時の特別配慮と通常授業での配慮とどちらも含まれていたが、いずれも補償のための支援が中心であった。以下に支援例を列挙する(表2)。

表2 日本語コースにおいて行われた支援の実例

-
- ・ 試験での時間延長(25%程度まで)
 - ・ 試験問題の拡大コピー
 - ・ 試験の解答用紙の表紙に注意書きをつける
 - ・ 別室受験
 - ・ 授業の録音の許可
 - ・ 読み物の電子化
 - ・ 読み物や課題図書のリストを早めに知らせる
 - ・ カラーコピー、色を使ったテキストの使用
 - ・ ノートテーキングの補助、ATsの使用
 - ・ ワードプロ使用の許可*
 - ・ 寛容な採点(特に漢字テスト)
-

試験での時間延長は、大学間で規定が異なるが、25%までの時間延長が認められている教育機関が多いようである。ワードプロ使用の許可は、支援センターからそのように要請を受けても、作文や漢字のテストなどで手書きが求められるときは学生や支援センターと話し合っただけでワードプロの使用が結局認められなくなる場合もあるようである。漢字テストにおける寛容な採点に関しては、支援センターからの要請というよりも担当教師の裁量に任せられる部分が多いと思われる。

3.2 教師の感じる困難

上述の欧州の日本語教師に対するオンライン調査の質問項目の一つであった「(支援する際に)どんなことに困っていますか」という質問に対する英国の教師からの回答は、以下にまとめられる(表3)。

表3 教師の感じる困難

-
- ・ 文字、漢字、語彙の記憶が困難
 - ・ 読み書きに時間がかかる
 - ・ 本人が努力しても成績に反映されない
 - ・ 評価、ディスレクシアと個人の能力との線引きが難しい
 - ・ 申請しない学生や試験直前に申請する学生には対応することが難しい
 - ・ 文字のフォント変更や拡大コピーなどに時間を割かねばならず、教師の負担が大き
-

なること

この調査より以前のものには 2005 年に英国エセックス大学の複数のヨーロッパ言語の語学教師を対象に行われたもの (Hill & Roed, 2005) があるが、評価の際にディスレクシアと個人の能力との線引きに悩む点などに、同様の傾向が見られる。逆に、文字・語彙をなかなか覚えてもらえないという回答は、アルファベットを使用するヨーロッパ言語よりも、日本語教師に特徴的な悩みのようなものである。

3.2 学生の感じる困難と役に立った支援

支援を受ける学生自身は、どのようなことに困難を感じているのであろうか。以下は、2015 年と 2016 年に実施したディスレクシアを持つ元日本学専攻の大学院生二名に対するインタビュー調査 (西澤, 印刷中) で得られたコメントの要約である (表 4)。

表 4 学生の感じる困難

-
- ・ 漢字・語彙の記憶が困難。
 - ・ 漢字・語彙以外にも覚えること・やることがたくさんあり大変。
 - ・ 学習の管理が困難。定期的に会って一緒にやるべきことができているかどうかチェックをしてくれる人が必要。
 - ・ 覚えることを求められる日本語の学習とクリティカル・シンキングを求められるその他の科目との両立が大変。
 - ・ 忙しすぎて、今まで機能していた自分なりの学習方法が機能しなくなった。
-

-
- ・ 教材の視覚的な配慮 (文字フォント、カラー、サイズ)
 - ・ 時間延長 (絶対に必要)
 - ・ 担当教師との個別セッション (自分のことをよく知っている人だからこそ意味がある)
 - ・ メンター制度の活用 (学習の管理、時間管理を支援してくれる人)
 - ・ 一人のスペース+自分のペース
 - ・ 多様な評価基準、フォーマット
 - ・ 明示的な説明 (絵や図を用いて、単純明快にしてほしい)
 - ・ 語彙学習のためのアプリ (例: Anki)
-

表 5 学生にとって役に立った支援

日本語教師同様、学生も、漢字や語彙の記憶が大変であると感じているようである。Anki などの語彙学習のためのアプリは手軽で大変役に立つとのことであった。その一方で、教師のコメントには見られなかった学習の管理の大変さについてのコメントにも注目すべきであろう。教師は文字・語彙の習得という点に意識が行きがちであるが、大学院のように要求の高いコースでは、それと同じくらい、またはそれ以上に他の科

目との両立や時間管理に対する支援を必要としているようである。そのような意味で、先に述べたメンターの存在は、彼らにとって非常に重要なものであると思われる。

実際、同インタビュー調査では、「何が役に立ったか」という質問に対して、メンター制度の活用や日本語教師との授業外での個別セッションが役に立ったというコメントが得られた(表5)。インタビュー協力者によると、担当教師から授業外に個別指導を受けることは、倫理上要求することが憚られるかもしれないが、「履修しているコースの内容と自分の症状やニーズと両方をよく理解している人とのセッションであるからこそ意味がある」そうで、どんなに素晴らしい教師であっても自分のニーズを理解してもらうために一からまた時間をかけて関係を築かねばならないのなら支援を受ける意味が薄れるとのことであった。

その他の有意義だった支援としては、時間延長、絵や図式を用いた明示的な読解テキストの説明、一人のスペースを確保し、自分のペースで行える環境などが挙げられた。また文字のフォントを変更したり拡大コピーしたりすることは、教師にとって時間的負担がかかる作業であるが、学生からすると有難い対応のようである。なお、先に述べた Hill & Roed (2005) の調査報告でも、似たような結果が報告されている。

4. まとめと日本語教育の現場における支援の課題

英国の高等教育機関におけるディスレクシアを抱える学生への支援については、次のようにまとめられる。1) 各教育機関には支援のための窓口として学生支援センターが設置されている。2) 学生支援センターの業務はディスレクシアの診断から支援内容の決定、学部への通達、さらに一般の学生・教員向けの啓蒙活動などが含まれる。3) 学生支援センターが行う支援は、補償的支援が中心である。メンタリングも実施しており、これはディスレクシアの学生にとって大変役に立つ。4) 日本語コースで学ぶディスレクシアの学生は、漢字や語彙を効率よく覚えるための支援を特に必要としている。5) 教師による学習項目の説明は、絵や図を用いてできる限り明示的になされることが望ましく、時には個別セッションも必要である。6) 要求の高いコースで学ぶ学生にとっては効率よく覚えることに加えて時間管理・スケジュール管理をうまく行えるかどうか成功の鍵になる。

英国は支援体制がある程度整った国であり、正式にディスレクシアであると認められれば、学生は、時間延長などの特別配慮や、メンタリングなどの人的支援を確実に受けることができる。しかしその一方で、文字や語彙の記憶や明示的な説明の必要性など、語学学習に特有の支援ニーズは、現場の教師に委ねられていると言える。ディスレクシアの学習者が文字や語彙を記憶するには、様々な方法で何度も過剰なまでに繰り返し練習することが必要である(Crombie, 1999)。支援センターが提供する補償のための支援だけではなく、困難を克服して覚えるためのリメディアルな支援が必要である。語彙学習のためのアプリなど、最新のテクノロジーが役に立つことは間違いない。また、リメディアルな支援は、ディスレクシアのあるなしに関わらず、全ての多様な学習者にとって役に立つはずである。現場の教師に求められる今後の課題は、リメディアルな支援として何ができるか考え、試行錯誤を重ねて行くことであろう。

注

1 英国の大学における成績は大きく分けて、ファーストクラス (first class)、上位セカンドクラス (upper-second class)、下位セカンドクラス (lower -second class)、サードクラス (third class) の四段階と、落第 (fail) で示される。英国ではどの成績を修めて卒業したかがその後の就職や進学に大きく影響するため、上位セカンドクラス以上での卒業が望ましい。ファーストクラスを修める学生は少数だが、近年上位セカンドクラスを修める学生数は増加する傾向にある。

参考文献

- British Dyslexia Association. Retrieved from <http://www.bdadyslexia.org.uk/about-us.html>
- Crombie, M. (1999). *Foreign Language Learning and Dyslexia*. Retrieved from <http://languageswithoutlimits.co.uk/resources/Dxa1.pdf>
- Department for Business Innovation and Skills (2014). Higher Education, Disability Students' Allowances: Equality Analysis, December 2014. Retrieved on 29 December, 2016 from https://www.gov.uk/government/uploads/system/uploads/attachment_data/file/392610/bis-14-1108-higher-education-disabled-students-allowances-equality-analysis-revised-16-12-2014.pdf
- Department for Education (2016). Participation Rates in Higher Education: Academic Years 2006/07 to 2014-15. Retrieved on 18 September, 2016 from https://www.gov.uk/government/uploads/system/uploads/attachment_data/file/552886/H_EIPR_PUBLICATION_2014-15.pdf
- Disability Rights UK. Retrieved from <http://www.disabilityrightsuk.org>
- Guidelines for Learners with Dyslexia, University of Hull (2011, June 23). Retrieved from <http://www2.hull.ac.uk/fass/modern-languages/facilities/support/dyslexia-and-modern-for-foreign/dyslexia-guidelines.aspx>
- Higher Education Statistics Agency (2015). UK Performance Indicators 2014-15: Widening Participation. Retrieved on 18 September, 2016 from: <https://www.hesa.ac.uk/data-and-analysis/performance-indicators/releases/2014-15-widening-participation>
- Hill, J., & Roed, J. (2005). A survey of the ways universities cope with the needs of dyslexic foreign language learners and, in consultation with tutors and learners, the piloting of appropriate assessment methods. *LLAS, The HEA*. Retrieved on 12 January, 2014.
- Lewthwaite, S. (2014) Government cuts to Disabled Students' Allowances must be resisted. *Disability & Society*, 29.7, 1159-1163.
- McKnight, L., & Davis, C. (2012) Current perspectives on assistive learning technologies. 2012 review of research and challenges within the field. *The Kellogg College Centre for Research into Assistive Learning Technologies*. University of Oxford.

- Richardson, John TE, and Taeko N. Wydell. (2003) The representation and attainment of students with dyslexia in UK higher education. *Reading and Writing*. 16.5, 475-503.
- Cameron, H. (2015, Dec 15). The market will drive out dyslexic students. *Times Higher Education* Retrieved from: [https://www.timeshighereducation.com/comment/the-market-will-drive-out-dyslexic-students].
- 池田伸子・大島弘子・西澤芳織・守時なぎさ (2016). 「日本語教育とディスレクシア—ヨーロッパの日本語教育機関における対応の現状と展望—」『ヨーロッパ日本語教育』第19回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム報告・発表論文集20, ヨーロッパ日本語教師会.
- 窪田知子 (2007). 「イギリスにおけるディスレクシア児への教育的対応をめぐる動向に関する一考察」『京都大学大学院教育学研究科紀要』第53号233-245.
- 西澤芳織 (2014). 「イギリスにおける対応」立教日本語教育シンポジウム2014口頭発表資料.
- 西澤芳織 (印刷中). 「日本語教育におけるディスレクシア支援—学習者のナラティブ分析が示唆するもの」第20回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム報告・論文集21, ヨーロッパ日本語教師会.